

観光研究所 だより

Vol.7
No.1

Summer 2010

CONTENTS

淘汰と再生—ホテルパシフィック東京が築き上げてきたものと「これから」—	1〜3
株式会社 ホテル京急 取締役社長 ホテルパシフィック東京総支配人 玉井 和博氏	
2010年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」新講義案内	4
2010年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」受講受付のお知らせ	5
2009年度 研究調査報告	6〜9
松村 公明、杜 国慶	
シリーズ 韓国最前線	10
劉 亭淑	
シリーズ 九州便	11
曾山 毅	
所長の海外体験記 その10	12
小沢健市(観光研究所所長)	



発行:立教大学 観光研究所
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL.03-3985-2577 FAX.03-3985-0279
E-mail: kanken@grp.rikkyo.ne.jp
www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/

淘汰と再生 —ホテルパシフィック東京が 築き上げてきたものと「これから」—

株式会社 ホテル京急 取締役社長
ホテルパシフィック東京総支配人 **玉井 和博氏**



玉井 和博氏 略歴

1971年 立教大学経済学部卒業、京急興業株式会社入社(現・京急不動産株)
1993年 株式会社ホテル京急出向(2003/4転籍)
ホテル・グランパシフィック・メリディアン
開発準備室・資材担当課長
1999年 ホテル・グランパシフィック・メリディアン
総支配人室長
1999/2月 株式会社ホテル京急 統括資材部長
2001/1月 ホテル・グランパシフィック・メリディアン
宴会部長
2001/6月 ホテル・グランパシフィック・メリディアン
取締役副総支配人兼 営業統括部長
2004年 ホテルパシフィック東京取締役副総支配
人兼 総支配人室長 兼 営業企画部長
2005年 株式会社 楼 蘭 代表取締役社長 兼職
2007年 ホテルパシフィック東京常務取締役
総支配人
2008年 現職/株式会社ホテル京急・代表取
締役社長
ホテルパシフィック東京総支配人

昨年3月ホテルパシフィック東京は、品川駅東口再開発計画と設備の老朽化を理由に、2010年9月末での閉館を発表した。「ビジネス&コミュニティ」をキーワードとして地元との密接な繋がりを育み、昔も今も品川を代表するこのホテルの行く末に、関係者はもちろん、利用者の中にも戸惑いや一抹の寂しさを感じる人は少なくないだろう。立地や景観美はもちろん、料理、質の高いサービス、そして数々の歴史。人々に愛され、評価され続けた「都会のオアシス」的名門ホテルがまた一つ消えてゆく。レストラン部門では「知食」という新分野に積極的に取り組み、2004年から副総支配人、そして2007年より総支配人として、同ホテルと共に歩んでこられた玉井和博氏に、スタッフと築き上げてきたもの、自身のこれからの展望について語って頂く。



ホテルパシフィック東京 外観

「人」玉井 和博氏にQ&A!

5Q
5A

①「人生とは…」に続く言葉は?

「思い通りの人生ではなかった。しかし良かったと言える人生だったかもしれない。」(アルセーヌ・メルセデス・ヒロコ)という格言があります。「人生とは…」という質問の答えには繋がらないかもしれませんが、私自身そう言える人生を送りたいと願っています。

②最近感じた一番の「驚き」は?

中国・上海、2年半前に訪問した際と、この4月視察時に見聞した上海(万博会場他)の劇的な変わり様。国家プロジェクトを動かす中国という国自体の勢いと力を目の当たりにしての驚き。

③好きな言葉は?

「至誠にして動かざるものは未だこれあらざるなり」(孟子)

④現職に就いていなければどんな道に進んでいたか?

22年間不動産事業に携わっていたので、やはり不動産関連の仕事でしょうか。

⑤今やりたい事は?

今の私にとっては“やらなければならない事”となりますが、9月末での歴史あるこのホテルの閉館と、全社員の次ステップへの道筋を立て10月1日を迎えること。

■1971年設立以来ホテルパシフィック東京が築き上げてきたものとは。

ホテルが開業した1971年当時は、この品川の地に地上30階建、1000室レベル、フルスペックのホテルがあるということ自体が理屈抜きにステイタスであり、コンセプトでした。それから39年が経過し、ホテルの有り様もマーケットも全く様変わりしてきました。

「これがパシフィック」という形は根底にあるとしても、開業時そして私が17年前にホテル業界に異動してきた時、また3年前に総支配人を引き受けた時とは、このホテルの役割や課題は大きく異なっています。従ってご質問には、私が総支配人就任時に、ホテルで働く全てのスタッフに対して示した3つの基本要綱からなる「総支配人基本方針」を基にお答えします。

① Mission Statement【理念】

“お客様中心主義”と“地球環境保全”の二大テーマのもと、日本文化を基本に国内外のお客様そして地域社会との共生（共成）に根ざした「ビジネス&コミュニティ・ホテル」を目指す

② Corporate Value【行動規範】

One for all, All for one!! 一人（個人）は全体（組織）のために、全体（組織）は一人（個人）のために

③ Vision【将来展望】

“粋で世話好き”を発信する総合シティホテルとして「価値観」を共有していただけるお客様にとっての“オンリーワンホテル”を目指す

スタッフが各々明確な目標設定をし、相互に共働意識を持った組織作りを目指すことが会社全体の利益につながります。その為にまず会社としての基本的な考え方や具体的な行動指針をスタッフに示すことがトップの責務です。私はホテルパシフィック東京が目指すべき方向性のベースとして、“粋で世話好きなビジネス&コミュニティ・ホテル”を掲げました。そして、個々の目標設定・行動が枠組みからはずれそうになった時、私が軌道修正はしても、トップとして常に答えを導き出していく訳ではありません。実際に動くのはホテルのスタッフ自身ですから、その為に何をすべきかを皆で考えて欲しいのです。そこで公式の組織とは別に「粋なサービス推進委員会」や「粋な商品企画推進委員会」といった男女半々、30代までで構成されるインフォーマルな委員会を設置しました。私はその委員会からの提案に一切注文はつけず、助言もしませんでした。各委員会が迷った時には、常設されている社内ラン・総支配人ホルダーの中の前述基本理念を何度でも読み返すよう指示しました。それは、答えに繋がるヒントをその中から探し、自分達で決めたことは自分達の力で最後までやり遂げて欲しいという思いからです。私は生粋のホテルマンではありませんから、目標と枠組みは作っても、活動プランはホテルサービスのプロであるスタッフたち自身で作り上げて欲しいのです。

■CS（顧客満足度）の高さで定評のある貴ホテルスタッフのホスピタリティについて。

総支配人になって以来、私自身がCSの視点で具体的に何かを打ち出してきた、というよりは、ここで働く事の楽しさ、価値や意義といったものを少しでもスタッフ自身に感じてもらえるような組織作りを常に考え、実践してきました。スタッフもその点がクリアできてくれば、お客様へのサービスマインドの質は自然に上がるものと信じています。

■今回の貴ホテルの閉館決断について。

この場所は、品川駅東口再開発計画という大規模な再開発計画に含まれております。昨年3月25日の閉館発表は、この再開発計画

がかなり現実味を帯びて進んでいくだろうという判断によるものでした。一方、当ホテルは築39年という経年によって設備の老朽化が進み、思い切ったリニューアルなしには新しいホテルとの競争には勝てません。となると、その再開発スタート時期までに投資資金を回収できるか、が最大の焦点となります。ならば、中途半端な投資をするよりいっそ閉館し、姉妹ホテルであるお台場のグランパシフィックに資源を集約化して、新たなホテルビジネスの再構築を図ろうというのがオーナー（京浜急行）の意志決定でした。しかし今年2月、オーナーサイドのプレス発表のとおり、再開発計画の開始時期に遅れが生じているため、やむを得ずその間、ある程度設備面の改修をし、来年の春辺りから宿泊を中心とした宿泊特化型ホテルとして、5年程度を目途に運営していくということになりました。ただし、ホテルパシフィック東京としての営業は本年9月末を以て終了することに変わりはありません。



館外日本庭園

客室（ザ パシフィックフロア ダブルルーム）



——閉館後のホテルスタッフの処遇については。

閉館後の社員の処遇については、京急グループをあげて全面的にバックアップしていきます。ホテル業務への継続希望者は全員無条件でお台場のホテルグランパシフィックLE DAIBAに転籍してもらうことになっており、それ以外の職種を希望の社員については、雇用条件が合えば、グループ内企業に斡旋しています。また、外部への転職も積極的に支援しています。つまり雇用面では100%確保されるということです。

■現職のホテルスタッフに対して、総支配人として今一番伝えたいことは。

私は、昨年3月25日にプレス発表されてから閉館までの1年半を「会社、組織という概念は捨てて、純粋にサービス業で働く事の意義を考え、その上で自分に必要なスキルアップは何かを考えて欲しい。その為のバックアップは会社として最大限行う。」とスタッフに伝えました。サービス業で働く意味について誰に頼るのでもなく自分で考える。となると、この業種に従事するにあたり適、不適も見えてくるかもしれません。そうした点も含めて、一人のプロとしてよく考えてもらいたいのです。

■貴ホテルレストランで取り上げられている「知食」メニューとは。

一言で言うと、食に対して各人が自分自身の食生活を振り返る一つのきっかけになって欲しいという観点から生まれたメニューです。基本スペックである「360kcal・塩分2.2g以下」に限定されたメニューでも、こういうものが食べられるという一つのモデルケースとして発表しています。つまり、ホテルのFB（料飲）部門のプロトタイプ商品（自動

車メーカーでいう“F1”)なのです。これだけを商品として提供すればビジネスになる、健康になるというよりは、これだけスペックの高い調理技術と栄養価バランスの取れたメニューを作る事ができる、その技術と質が、もっと簡単なメニューを作る時にも同様に発揮されるというホテルの保証のようなものにも繋がります。また、「知食の会認定」はホテルとホテルのシェフのみが対象となりますので、認定ホテル以外の場所では提供できません。

■その採用経緯やそこから得たものは。

「知食」の生みの親であり同会の代表幹事でもある田中氏は、当ホテルフレンチレストラン「ブフドール」のご常連でしたが、長年の美食がもとで糖尿病になられ、医師からこれまでの美食、飽食を一切制限されたのです。それでも同氏が医師から言われた範囲内でどうしても美味しいものが食べたいと思われた事が「知食メニュー」に取り組んだきっかけです。私は本メニュー開発について全面的に協力をしてくれた前総料理長他担当シェフに心から感謝をしています。なぜなら、フランス料理は味の“足し算”であるにも関わらず、「知食」は“引き算”の概念であり、決して容易な挑戦ではなかったからです。また、メニュー発表当時は、調理関係者からは全く見向きもされませんでした。近年徐々に認知され、マスコミの取材も多く入るようなニュース性、そして何より医学会からも注目される話題性のある商品に育ちました。味については、単なる病人食のイメージとは全く違う感想を得られると思います。美味しさ、味付けの確かさ等は他のフレンチメニューと遜色ありません。また、当ホテルの閉館後もこのレシピを継承、またビジネスにしていくなために、数ホテルの総支配人そして総料理長にお集まりいただき、レシピの公開や技術の継承を試みしていますが、これがなかなか難しい。やはり事前準備が相当必要なメニューですから、効率性・収益性等の視点からいくとハードルが高い事は確かです。そこはホテルの使命感的なものにも訴えないと実現が難しいものかもしれません。一方、別のマーケットとして20代後半以上の女性をターゲットに、「知食」を美容や健康管理の視点から食生活を見直して頂くきっかけづくりとして利用していただけていると思います。やはり、本メニューは総合シティホテルでしか提供できないトータルなサービス(空間・雰囲気・安心感etc.)と共に提供される食事として楽しんで頂きたいと思っています。

■上記の「知食」メニュー等、今まで育まれてきたものの継承は。

私は技術的なものについての継承は、個々の努力があれば決して難しいものではないと思っています。それよりも、ホテルがその独自の商品、サービスやイベントを提供するにあたり、どういった裏付けに基づいているのかという事を理解し、それに対してきちんとアクションを起こせるか否かの方が大切です。読売新聞のコラムニストである竹内政明氏が、歌舞伎座が閉まる日の朝刊^{注)}に、歌舞伎という伝統芸能の役割を、一般庶民の生活の中にほんの少しの潤いと楽しみを与える「心の加湿器」という言葉で表現しておられました。私はサービス業とはそうあるものだと思います。我々がお客様に接する時、技術や経験だけではなく、「心の加湿器」的な気配りや人間関係を提供できなければ、本当の意味での潤いにも楽しみにもならないと思っています。そうした点をスタッフは忘れないで欲しいと思います。

■今までで特に思い出深いエピソードを。

総合シティホテルが地域社会のコミュニティ・ホテルを目指す中で、どのような役割を果たしていけば良いかということを考えた時に、その一つとして、極論ではありますが、ある意味“地域社会の公民館的な

機能”を持つべきだと考えています。昨年の年末年始イベントでこんなエピソードがありました。毎年お正月プランをご利用になるお客様たちに、ありきたりのサービスではなく、何か特別な体験をして頂こうと、大晦日に宴会場を開放して、NHKの紅白歌合戦を大スクリーンに映し、年越しそばだけでなく“年越しナポリタン”や“年越し焼きそば”、缶ビールなどを設置し自由な形で見て頂くという企画を実施しました。最初は不安もあったのですが、その時にお孫さんとご利用になられたお客様から「このホテルのお正月プランを初めて利用させて頂き、大晦日に宴会場で紅白歌合戦を見ることができたという企画を知って足を運んだのですが、非常に楽しい雰囲気、まるで映画の「有頂天ホテル」のようなホテルだなと思いました。」というコメントを頂いたのです。実は、私はホテルスタッフにずっと、三谷幸喜監督の『THE有頂天ホテル』のようなホテルを作りたいと言い続けてきたので、このコメント頂いた日は、喜びの余り、スタッフに「こういうコメントを頂いた。一歩ずつ理想に近付いている」と伝えました。



フレンチレストラン「ブフドール」

■ホテルエ「玉井和博」が目指すこれからとは。

私は、22年間不動産業、そしてこの17年間ホテル業に従事してきた者です。その間、ホテルビジネスというものを様々な角度から、特にお台場のホテル開業時には資材・購買業務全般も経験し、幸いにもホテルの裏と表の両方を実務レベルから実践させて頂きました。その後、経営に携わるようになってともに、当社のような“総合シティホテル”のビジネスモデルというものが投資サイドも含め総合的に成り立つのかという点に関して非常に疑問を感じています。不動産投資という視点からは、同じお金、同じ土地、同じ資産があるのであれば、何に使うのが有効かと聞かれた場合に、必ずしも「総合シティホテルです」とは即答できません。では、そうするためには何をすべきか。ホテルの第一線でこれだけスタッフが一生懸命お客様のために働いている、その結果がきちんと残るようなビジネスモデルにするためには、やはり在り方を変えていかねばならないのではないかと思います。気持ちをずっと持ち続けてきました。今まで築かれてきたホテル産業のあり方を否定する気は全くありませんが、21世紀も早10年が過ぎ、これから更なる新しい時代を迎え、新しいマーケット創造をするためにも、不動産業22年・ホテル業17年の経験をベースに、新しい「ホテル宿泊産業のビジネスモデル」を再考してみたいと思います。

——本日はご協力有難うございました。

(取材日:2010年5月12日)

注)『読売新聞』(2010年4月30日)朝刊1面「編集手帳」

2010年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」新講義案内

2010年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」は新しい講師の皆さまを3名お迎えし、更にバリエーション豊かな講義テーマを取り扱うことになりました。以下が講師、講義内容についての詳細となります（講義日順）。どうぞご期待ください！

■9月25日（土）/ 和魂米才のホテルマネジメント



プロシェフ・ユニバーサル 代表
飯島 幸親（いじま ゆきちか）

1942年生まれ。
成城大学経済学部卒業後、レストラン立山、帝国ホテル、札幌グランドホテル、ベルビューパレス（スイス）、ペニンシュラホテル（香港）などを経て、ロスアンゼルス・マリオット、シアトルマリオット、サンディエゴ・マリオットホテルで総料理長、コーポレートシェフ・メンバー（西部）を歴任。その後、マリオットインターナショナル・イン・コーポレート日本・韓国担当リージョナル・マーケティング・オペレーション部長、岐阜ルネッサンスホテル総支配人代行、名古屋マリオットホテル料飲部長、札幌ルネッサンスホテル総支配人代行、バンコックJWマリオット（タイ）やワイキキマリオットホテル（ハワイ）のオペレーション・ディレクターなどを歴任。米国各マリオットホテルでマネジメント・オブ・ザ・イヤーを受賞。
2000年 社団法人 全日本司厨士協会理事就任。
2007年からの2年間は横浜ベイシェラトン ホテル&タワーズ取締役兼オペレーション上級責任者に就任。
2008年 「和魂米才のホテルマネジメント」出版。
2009年 引退。サンディエゴに在住、日米での後身の育成に力を注ぐ。

アワード：

1990年 マリオットJWアワード受賞・外国人として初めてのレセピアン。
2007年 NICA（全米アイスカービング協会）殿堂入り、国際公認氷彫刻審査委員。
2010年 “総支配人になってほしい人”に選ばれる（オータパブリケーションズ主催）。

●和魂米才のホテルマネジメント

アメリカ生活、そしてマリオットホテル&リゾートでのマネジメント経験30年間を通し、グローバル化とその神髄のダイバシティをどう考え、世界の国々の中での先進国日本の有り方が問われる新たな時代に入ったと言えます。

その基本理念は地球上の如何なる国々や人間もみな公平、平等で幸福になる権利、そこには共存共栄と切磋琢磨のバランスを重視した考え方、言動、行動が常に求められます。

未だに日本社会に存在する理不尽な上下関係、性別、人種などの比較や違和感など、欧米から見ると立ち遅れており、その為のルール作り、法整備などのチェック機能が重要です。

日本の素晴らしいサービス文化である、“親切やおもてなしの心をお届けする”風習やしきたりは、残念ですが、ホテル企業が今まで通り提供していくことに限界が生じます。

他国と比較して健全企業としての利益確保が難しい現状、高い人件費、低い労働生産性、熟練経験者、若年労働力不足等旧態の経営など、我が国ホテル企業にとっては大きな課題です。

今後の日本ホテルはサービス自体の考え方、やり方に大きな変革が早急に求められます。

今までのようなサービスが当たり前ではなく、欧米と同様、お客様とサービスをする側の関係は等価交換であるべきです。なぜなら、“価格に即した価値”が正しく提供されているならば本来は対等でなくてはならないからです。合わせて、サービス側が常に頭を下げ低姿勢でへりくだっている姿は日本特有の慣習であることも認識すべき

です。日本のホスピタリティ業界が発展するには先ず企業として適正な利益の確保をし、仕事の方法を変え、能率生産性を高めなくてはなりません。同時にホテルの格付けを明確にして顧客側が戸惑わないような、業界ぐるみの環境作りが必要です。本来ホテルの仕事は欧米のように、もっと楽しく将来性のある若者が好んで入ってくる職業であるべきです。

グローバル展開をしてすでに3400ホテル、成功しているマリオットの経営と運営方式を例に取って紹介します。

■10月19日（火）/ 宿泊特化型ホテルの経営特性と課題



株式会社 スーパーホテル 会長
山本 梁介（やまもと りょうすけ）

1942年（昭和17年）1月19日生まれ。
1964年（昭和39年）3月 慶応義塾大学経済学部卒業。
現在、株式会社スーパーホテル会長、株式会社シティー・エステート会長、社会福祉法人聖綾福祉会理事長。

●宿泊特化型ホテルの経営特性と課題

1997年にITを活用したノーキー、ノーチェックアウトによる運営システムを開発して、特許庁よりビジネスモデル特許を取得したコストパフォーマンスの高いビジネスホテルを、スーパーホテルチェーンとして展開してまいりました。

特徴である、「安全・清潔・ぐっすり眠れる」と云うコンセプトでは他のホテルの追従を許さず、低料金・高品質の宿泊提供に加え、時代の要請に応えた省資源や省エネルギーの環境サービスで顧客満足度を高めてきました。

今後の、経営方針は宴会や飲食を中心とした高級高価な20世紀型ホテルではなく、宿泊に特化して健康と癒しを重視した「21世紀型の“ロハスなホテル”作り」をめざしています。

■10月21日（木）/ ホスピタリティ空間



桜美林大学ビジネスマネジメント学群教授
山口 有次（やまぐち ゆうじ）

桜美林大学ビジネスマネジメント学群教授。立教大学観光学部兼任講師。工学博士。『レジャー白書』余暇市場動向の執筆を20年近く担当。単著『観光・レジャー施設の集客戦略』『ディズニーランドの空間科学』など。観光・レジャー施設計画に関する論文多数。

●ホスピタリティ空間

人をもてなし楽しませるホスピタリティ空間には、人、物、情報、建築物、運営を有機的に組み合わせ、空間の利用者である人間の行動に的確に対応する空間づくりの手法が求められます。

利用者の行動は多様化し、欲求も高度になっており、経験と勘だけに頼った空間づくりには限界があるため、科学的根拠にもとづいた手法を総合的に理解しておく必要があります。

本講義は、観光・レジャー施設における利用者行動の法則性や人間行動の原理原則を明らかにしながら、利用満足度の高いホスピタリティ空間のつくり方を、複合化、休憩空間、空間配置、ユニバーサルデザイン、リニューアル、参加性、開放、景観、空間単位、コミュニケーション、クラブ化、などの視点から体系的に提示します。

2010年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」受講受付のお知らせ

2010年度「ホスピタリティ・マネジメント講座」の願書受付期間は7月1日(木)～7月23日(金)です。本学の在学学生・卒業生はもとより、高校卒業以上の資格をお持ちの方(もしくはそれと同等の能力を有する方)であればどなたでも受講いただけます。是非この機会を利用し、業界一流の講師陣の講義に触れ、新たなスキルアップを図ってみませんか。受講願書は観光研究所ホームページ(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/>)

のホスピタリティ・マネジメント講座、詳細・日程・募集要項の欄からダウンロードが可能です。また、希望者には詳しいパンフレットを当研究所にて配布しております。郵送をご希望の方は下記のE-mailアドレスにお名前、ご住所、ホスピタリティ・マネジメント講座パンフレット希望とご記入の上送信下さい。その他のお問い合わせは立教大学観光研究所までどうぞ。

本年度の講座時間割は下記の通りです。(2010年6月現在)

立教大学 観光研究所 (Tel: 03-3985-2577 Fax: 03-3985-0279 E-mail: kanken@grp.rikkyo.ne.jp)

月	日	曜日	火・木曜日19:00～20:30 7号館7101教室、土曜日 14:00～15:30 7号館7101教室		
			科 目	講 師	
9月	18	土	オリエンテーション	立教大学観光学部教授・観光研究所長	小沢 健市
	21	火	リゾート事業の現状と展望	株式会社星野リゾート 代表取締役社長	星野 佳路
	25	土	和魂米才のホテルマネジメント	プロシェフ・ユニバーサル 代表	飯島 幸親
	28	火	ホテルの新業態と開発	日本ホテル株式会社 取締役 経営企画部長	大見山 俊雄
	30	木	由布院の観光地づくりと旅館経営	由布院 玉の湯 代表取締役社長	桑野 和泉
10月	2	土	ホテル事業展開論	ホテルオークラ 代表取締役会長	松井 幹雄
	5	火	現代ホテル経営の課題	株式会社ロイヤルパークホテルズアンドリゾーツ 顧問	中村 裕
	7	木	観光立国実現に向けた観光庁の取り組みについて	観光庁 審議官	甲斐 正彰
	9	土	ホテルマーケティング戦略	(株)ホテル京急 代表取締役社長、ホテルパシフィック東京総支配人	玉井 和博
	12	火	ホテルの人的資源管理論	(株)阪急阪神ホテルズ 執行役員 グループホテル事業本部 副本部長兼事業開発部長	黒沢 直樹
	14	木	サービス・マーケティングの発想	明治大学 大学院グローバル・ビジネス研究科教授	近藤 隆雄
	16	土	温泉旅館の再生	日本ベストサポート株式会社 地域マーケティング室 室長	井門 隆夫
	19	火	宿泊特化型ホテルの経営特性と課題	株式会社スーパーホテル 会長	山本 梁介
	21	木	ホスピタリティ空間	桜美林大学ビジネスマネジメント学群教授 立教大学観光学部兼任講師	山口 有次
	23	土	ホテル資産投資の概要	ジョーンズ ラングラサールホテルズ 東京オフィス マネージングディレクター	沢柳 知彦
	26	火	ネット集客の実情～勝ち組と負け組の差は?～	(株)リクルート 執行役員 飲食情報カンパニー 旅行カンパニー カンパニー長	冨塚 優
11月	28	木	旅館経営の課題と展望	加賀屋 代表取締役会長	小田 禎彦
	4	木	ホテルのファシリティ・マネジメント	藤田観光株式会社 副社長	石原 直
	6	土	シティホテルにおける宴会会のマーケティング	前(株)JR東海ホテルズ専務取締役、大手前大学総合文化学部教授	四方 啓暉
	9	火	購買管理とFBC	フォーシーズンズホテル丸の内 東京 購買マネージャー	市橋 純
	11	木	ホテルにおけるIT経営	株式会社タップ 代表取締役会長	林 悦男
	13	土	ザ・リッツ・カールトンのホスピタリティ・マネジメント	前(株)阪神ホテルシステムズ(ザ・リッツ・カールトン大阪) 社長、流通科学大学教授	飯塚 義昭
	16	火	ホテル旅館法規①	畑・植松法律事務所 弁護士	畑 敬
	18	木	ホテル旅館法規②	畑・植松法律事務所 弁護士	畑 敬
	25	木	総支配人の職務	日本ホテル株式会社 常務取締役、ホテルメトロポリタン総支配人	塩島 賢次
	27	土	ホテルのレベニュー・マネジメント	株式会社JALホテルズ 執行役員 営業本部副本部長	藤崎 斉
12月	30	火	ホテルの顧客情報とISO	藤田観光株式会社 副社長	石原 直
	2	木	国際ホテル経営論	前日本スターウッド・ホテル(株)会長、前立教大学観光学部特任教授	平尾 彰士
	4	土	シティホテルにおけるレストランマーケティング	(株)ホテル京急 代表取締役社長、ホテルパシフィック東京総支配人	玉井 和博
	7	火	外食産業の経営システム	立教大学観光学部兼任講師	王 利彰
	9	木	ホスピタリティ産業の環境経営	川村学園女子大学人間文化学部観光文化学科准教授	丹治 朋子
	11	土	ホテルの社会的責任	社団法人日本ホテル協会 事務局長	満野 順一郎
	14	火	外食産業の新業態	立教大学観光学部兼任講師	王 利彰
	16	木	ホテル経営とデザイン	(株)デザインの森 代表取締役社長、(社)国際観光施設協会 副会長	森 一郎
	18	土	ホスピタリティ産業の課題と展望	立教大学名誉教授、帝京大学経済学部観光経営学科教授・学科長	岡本 伸之

2009年度研究調査報告

パリ・カイユの丘界隈の景観観察

立教大学観光研究所所員
観光学部教授 松村 公明

2009年11月にパリを訪問し、市域外縁部に位置するいくつかの街区を踏査した。ここでは、パリ13区の結節点であるイタリー広場Place d'Italieの南西、カイユの丘La Butte-aux-Cailles界隈の踏査から、パリ小郊外の景観について報告する。

イタリー広場は、18世紀後半～19世紀中葉にかけて、全長24kmに渡ってパリを取り囲んでいた「徴税請負人の壁」の市門（入市税徴収所）跡を起源とする。現在、イタリー広場を起点に南下するイタリー通りAve.d'Italieは国道7号として、フランスの主軸であるPLM軸（Paris-Lyon-Marseille軸）を貫き、地中海沿岸コートダジュールを文字通りイタリアへと続いている。一方、イタリー広場を東西に横切る大通り(Bd.Auguste Blanqui-Bd.Vincent Auriol)は、徴税請負人の壁の取り壊し跡に造成された環状道路であり、大通りを境にその内側と外側との市街化にタイムラグがあることが、現在の都市景観に見て取れる。

イタリー広場の南西に広がるカイユの丘界隈は、徴税請負人の壁の外側、当時の「小郊外」に当たる。カイユの丘界隈は、Michelin (2009) に、パリ市内の見どころ38地区の一つとして取り上げられ（ただし、★は付されていない）、2.5万分の1地形図「Paris」によれば、この界隈を「自然歩道Grande Randonnée」も通過している。



写真1. カイユの丘・ポール＝ヴェルレーヌ広場付近にみる景観のコントラスト

しかし、2008年に二度に渡って界隈を踏査した観光学部学生が「パリとは思えない」と述べているように、ミシュランタイヤ社（1991）では、「今日この地域には驚くべきコントラストが見られる。舗装の傷んだ小道や屋根の低い平屋住宅が近代的高層住宅ビル群に浸食されつつある。昔風の村の上に



写真2. モンマルトルの丘から望むパリ13区の高層ビル群
パリのスカイラインは、地形の影響も受けつつ、中心部で低下し、縁辺部で上昇する。写真中央の鉄骨の建物はボンビドーセンター（1977年開館）。

新しい都市が折重なっている」と記され、この記述は最新の仏語版（Michelin, 2009）でも概ね維持されている。写真1は、ポール＝ヴェルレーヌ広場付近から東の方向を撮影したものであるが、アジアの都市の特色でもあるこのような新旧の景観的コントラストは、パリにおいては興味深い都市景観として特筆されるであろう。これら家並みの向こうにそびえる近代的な高層ビル群は、イタリー広場の南側に広がる一連の再開発プロジェクトによってもたらされた。再開発プロジェクトの中には、ショワジーの三角地帯Triangle de Choisyを中心とする「レゾランピアドLes Olympiades」と「マセナMasséna」の地域開発プロジェクトがある。これらのプロジェクトは、低家賃住宅を含む多様な階層向けの集合住宅、教育施設、商業・スポーツ施設の複合開発によって、「対照的な社会集団の間で調和のとれた交流を生みだし、共生を促す」（パンソン・パンソン＝シャルロ, 2006）ことを目的とした。しかしながら、結果的には



写真3. 地方小村の街路を思わせるカイユの丘・サンクディアマン通り

パリ市民に忌避され、1970年代半ば以降、インドシナからの中国系移民の流入と定着が進展し、現在では欧州最大のインドシナタウン（チャイナタウン）「Quartier asiatique」に成長している。もともと鉄道用地や工業地帯であったこれら高層ビル群の地下空間には、パリの建物を生み出してきた石灰岩の採掘場跡が広がっており、リアー・ファイ(2009)によれば、「地下がスイスチーズのように穴だらけになっている事実は、ポンピドゥー大統領時代の高層ビル建設ブームにおける大問題であった。イタリア広場の南の高層ビル群を建設する際、ぼろぼろの地盤にコンクリートの柱を何本も埋めこまなくてはならなかったほどである。」という(写真2)。同書に掲載された略図によれば、地上の景観的コントラストとは裏腹に、石灰岩採掘場はレゾランピアド地区からカイユの丘にまで広がっており、地下空間ではインドシナタウンとカイユの丘は小郊外としての等質的な性格を帯びていることがわかる。

高層ビル群を仰ぎ見ると同時に、パリの建物を生み出してきた石灰岩採掘場を足下に意識すると、1783年にパリの西、ミュエットを飛び立った気球が着陸した当時の「小郊外」の気配を、カイユの丘の村落的な街路景観(写真3)をとおして、明瞭に感じ取ることができる。セーヌ河岸を軸として両岸に広がるパリらしい都市景観は、観光客がほとんど訪れることのない小郊外から郊外に至る、広大なパリ大都市圏の都市開発と引き替えに成立していることを改めて実感した。

参考文献・資料

ギュンター・リアー、オリヴィエ・ファイ著、古川まり訳(2009):『パリ 地下都市の歴史』東洋書林。
ミシェル・バンソン、モニク・バンソン＝シャルロ著、野田四郎監訳(2006):『パリの万華鏡 多彩な街の履歴書』原書房。
ミシュランタイヤ社(1991):『パリ ミシュラン・グリーンガイド』実業之日本社。
IGN(2003):『2.5万分の1地形図Paris』
Michelin(2009):『Paris Le Guide Vert』

キューバの観光を考えて

立教大学観光研究所所員
観光学部准教授 杜 国慶

「人類がこれまでに目にした最も美しい土地!」、かつてコロンブスがオルギンの浜辺に上陸した際に、カリブ海に浮かぶキューバの真っ白な砂浜と緑豊かなジャングルを見て、このように呟いた。その通り、「カリブ海の真珠」と呼ばれたキューバには、一年中泳げる良好な気候と格好のリゾート地など自然資源に恵まれている。さらに、長い間スペイン植民地であったことと、サトウキビのプランテーションで使われたアフリカからの奴隷が連行されたことによって、スペインとアフリカが融合して作り出したダンスと音楽がキューバ文化として芽生え、観光客を惹きつける魅力となっている。

1. 観光開発の歴史と位置付け

現在、観光と砂糖産業が国の経済を支える中心的な存在である。2007年の統計によると、観光収入額は24億ドル、観光客は212万人で、観光産業は外貨獲得源として最大であり外貨収入の約4割を占めるといわれる。観光産業の存在感は、国の産業別人口構成からもわかる。発展途上国にも関わらず、第三次産業の従業員数は65.0%と高い割合を占める。

キューバの観光開発は実に早くから行われた。容易にアクセスできる立地と温暖な気候に魅了され、北米人は1900年代初めからキューバを主な保養地として訪れた。1915年までにキューバ島に72軒のホテル(うち27軒はハバナ)が建設され、1930年代には観光の年間平均収入は1200万ドルを超え、砂糖(1億1600万ドル)とタバコ(1400万ドル)に次いで重要な「輸出」商品成長してきた。例えば、1938年にキューバはカ



ハバナ旧市街ではクラシック・カーがよく見かけられる

リブ海地方を訪れる旅行者全体の37%も占めた。1950年代後半まで、キューバはカリブ海諸国の中で最初かつ最も重要な国際観光の拠点であった。

革命および米国との関係の悪化とともに、観光客数が減少した。観光が再び重要視されはじめたのは、砂糖産業が打撃を受けた1970年代のことであった。1975年の5カ年計画では、1980年までに30万人の観光客を誘致することが目標として掲げられた。1976年、観光庁が設置され、主な業務は国際観光のマーケティングと位置付けられ、徐々にその重要性は高まってきた。

1990年代の10年間で、観光収入は8倍、観光客数は5倍、外国観光客用の部屋数は3倍、直接雇用は2倍と観光産業発展の成果が分かる。

現在、キューバを訪問する外国人観光客は、「北の渡り鳥」と呼ばれるカナダ人の割合が最も多く第1位を占めている。2002～06年の5年間の外国人観光客入込数では、カナダが532万人、次いで英国225万人、ドイツ199万人、フランス

91万人、イタリア90万人、スペイン59万人、ロシア19万人の順となる。

2、革命色彩の濃さ

キューバで観光する際に感じられるのはまず、革命色彩の濃さだ！

革命によってキューバは米国の半植民地から独立した。政府にとって、革命の功績を国民に覚えさせるのは何より重要なことである。このような施策と方針は、中国が共産党を讃える「紅色旅遊」とも同じく社会主義の共通点であろうか。



革命を懐かしむ老人

ハバナ市内で最も魅力的なのは世界遺産と登録された旧市街であり、歴史を見守ってきたさまざまな建造物がハバナの500年の歴史を語っている。最大の魅力と言えば、21世紀になってもモダンな建築物の侵入を拒んでいるところではないだろうか。中でも、海賊と敵国海軍から巨万の富を守ってきた要塞が、ハバナの都市景観を規定する重要な存在である。しかし、ハバナ市の観光ツアーは殆ど革命広場から始まるようにアレンジされている。海賊だけではなく、陸路からの敵を防ぐために1763年に造られたカバーニャ要塞はハバナの歴史において重要な存在であるにもかかわらず、チェ・ゲバラの邸宅になったことから、現在も要塞の歴史よりチェの写真が多く展示されており、学生などが革命を学ぶビデオ室などが設置されている。

ハバナ旧市街では、旧大統領官邸が革命博物館に転用され、カストロとチェ・ゲバラが革命軍がメキシコからキューバに密航した時に使われたヨットがガラスケースに収められている。同様に、キューバで欧州人が最初に建設した町、17世紀にスペインの植民地統治の中心地として栄えてきたサンタ・クララのツアーでも、その町に関する説明はなく、ゲバラによって解放された町であるため、案内されたのは革命記念碑とチェ・ゲバラのモニュメントだけであった。

観光でも革命の色彩の濃さが強く感じられた。

3、観光振興としての中華街

国策とも言える観光振興の重要な一環として、旧市街地の西側にある中華街が整備されてきた。美食で観光客を引き



広場で観光客と記念写真を撮りチップを稼ぐ女性たち

付ける観光資源として、中華街は多くの国々で重要視された。

中国人が大規模にキューバへ移住したのは、スペイン人がさとうきびプランテーションの労働力として広東人を契約労働させた1847年に始まった。8年の契約満了後も、中国移民はキューバに永住し始め、ラテンアメリカで最大規模の中華街を誇るハバナの中華街を築いた。しかし、共産党革命の成功とともに、多くの中国系キューバ人起業家は米国に逃亡した。

現在、観光産業の活性化を図って、中国本土と海外中国人とくに中国系カナダ人に中華街への投資を呼び掛ける。客席数の規制もなく、低い税率などの優遇政策が実施されている。入口には巨大な「華人街」と書いてある牌楼が建設されたものの、実際の中華街は見付かり難いほど小さい範囲に止まっている。長さ50mくらいの狭い路地に10余軒の中華レストランと雑貨店が並び、店員は殆ど地元のキューバ人である。

一軒のレストランで食事をすることにした。緑茶を注文したら、店員がまず急須にお湯を注いでから茶葉を入れるという、中国茶の通常の入れ方とは全く違う手順を採った。出された春巻にはアンが掛けてあり、紅焼魚塊（魚の甘辛煮）には醤油の旨みがまったくなく、今まで食べてきた中華料理とは異なるものだった。厨房を覗いてみたら、料理人も地元の方であったので、納得した。



いつも観光客で賑わうカテドラル広場

外資法はすでに1982年に制定され、95年に新外資法ができて、多くの産業への外国投資が可能になった。ハバナなどには保税加工区も設けられている。現在、外資導入は防衛や教育などごく特定の部門を除いてあらゆる産業で可能だが、最も多くの企業が参入しているのはやはり観光部門である。しかし、ハバナの中華街は、中国人コミュニティによって営まれる街ではなく、あくまでも観光振興および外国投資誘致の手段であるとし考えられない。



1589年に築かれたモロ要塞

4、二重構造の経済と社会

キューバの色々なところを見学すればするほど、経済と社会のあらゆる場面で二重構造を感じられ、混乱してしまう。例えば、2007年の統計では、乳児死亡率は5.1%、平均寿命は男性が76.5歳、女性が80.6歳、識字率は99.8%と米国には絶対劣らない高い水準であるものの、国民の生活は決して豊かと

は言えない。子供には毎日の牛乳が配給されるものの、大人が肉を手に入れることは大変困難である。五つ星のホテルには立派なコーヒーマーカーが置いてあっても、コーヒーの粉は用意されていない。同行したガイドは、「平等主義で贅沢は許されない!」と言っていた。この様に、生活の面では米国の経済封鎖による物資の不足がしばしば感じられる。

外国人観光客は兌換ペソ(CUC)で、キューバ国民が使用する人民ペソ(CUP)とは異なる。この規制によって、外国人が二重価格の被害を受けるだけでなく、外国人しか使えないレストランなどの施設には、地元の住民は入れない。外国人と地元住民との交流する場が限られ、観光の味わいが薄まる。

ハバナの夜のエンタテインメントと言えば革命前の1930年代から贅沢な趣向を凝らした有名なキャバレー「トロピカーナ」である。入場料が80~100兌換ペソと高値で、人民ペソも使えないため、キューバ国民には無縁の存在となる。革命前も現在も、踊り子と従業員を除けば市民から隔絶されており、社会矛盾の綻びが目立つ。

参考資料

- 上野清士(2000):ハバナの現在—キューバ・華やぐ「観光」のかけで—。月刊自治研, 42(488), 5-12.
 江口信清(1991):観光立国キューバの苦悩。季刊民族学, 15(4), 114-122.
 後藤政子・樋口 聡 編(2002):キューバを知るための52章。明石書店, p287.
 塩浜秀夫(2005):キューバ観光の発展と観光関連企業の再編成。東京国際大学論叢(商学部編), 72, 1-11.
 塩浜秀夫(2009):基幹産業に成長したキューバ観光産業の現状—2008年の日本・キューバ経済懇話会の議論を踏まえて—。東京国際大学論叢(商学部編), 80, 81-104.
 新納克広(訳)(2001):キューバにおける観光開発。奈良県立商科大学研究季報, 11(4), 47-72.
 二宮書店(2010):データブック オブ・ザ・ワールド, p479.



ハバナ旧市街に聳える旧国会議事堂とガルシア・ロルカ劇場

(写真はすべて筆者が2010年2月に撮影したもの)

シリーズ

韓国最筋線 ~その十二~

東義大学校商経大学ホテル・コンベンション経営学科助教授
劉 亨淑

여대생커리어개발센터
女大生キャリア開発センター

今年の1月から、当学の「女大生キャリア開発センター」のセンター長に任命された。「女大生キャリア開発センター」は女子大学生の就職活動が円滑に進むように、進路開発から就業支援に至るまで総合的な事業を運営している大学内の機関である。

韓国政府は2001年、「女性部」を発足しながら女子大学生のキャリアに関心を持つようになり、高学力女性の人的資源の活用度を高めることにその目的をおいて全国の男女共学大学へ「女大生キャリア開発センター」の設置・運営を支援してきた。2003年から「女性発展基金」の支援で大学へセンター設置の支援を行い、2010年現在、31大学（8大学は条件つき認定）の「女大生キャリア開発センター」を指定し、これらの19大学へ予算を支援している。また今年からは「女性家族部」と「教育科学技術部」が共同でこの事業を推進している。「女大生キャリア開発センター」は、毎年公募を通じた公開競争から選定され、利用者数ⁱⁱおよび運営プログラムの種類が多様である。

当学は2006年から今年まで5年連続で「女大生キャリア開発センター」として指定され、政府の支援を受けている。大学内の就職支援部署には「人力開発処」などがあるが、女子大学生の特性を考慮した進路開発および就職支援の事業を運営しているとは限らない。つまり本センターは、女子大学生を対象と限定し、大学生活のはじめから学年別、段階別に職業能力開発および就職連携サービスを提供しているわけだ。今年、本センターは主に女子大学生のためⁱⁱⁱに、5つの領域^{iv}で21プログラムを通年で運営している。



個人別キャリア開発管理プログラム

最近韓国では“女風”・“女高男低”の風潮が強いといわれている。昨年新しく任命された法官92名中、女性は62名（72%）、新規に任命された検事112名中、女性は58名（51%）を占

めている。さらに韓国の高級公務員の任用に当たる試験「考試」では女性合格者の比率が過半数を超えており、首席合格者が女性であるということも普通になりつつある。

しかし、UNDPが発表した2008年度「女性権限尺度（GEM: Gender Empowerment Measure）」指数は68位であった（2007

年度には64位）。GEMは国会の女性議員議席の比率、企業の高位職の役員・専門職の女性比率、男女所得比などを評価し、政治および経済分野の女性参画度を指標化したものである。



ジェンダー意識強化および仕事・家庭両立プログラム

これは韓国社会が女性のために制度的・構造的矛盾に陥っていることをあらわしている。実際に、社会へ参画する女性は増える一方であるが、出産・保育・教育政策は未だ最低の水準であるといえる。

また、大卒以上の高学歴の場合、30代はじめまでは女性が男性より長い勤続期間を示しているが、30代半ば以降で平均勤続期間が留まっている。これは女性たちの妊娠・出産・育児などでの経歴の断絶、再就職を放棄するLカーブを意味している。高学歴女性の経歴断絶は結局、企業の競争力を悪化させる。女学生の大学進学率が90%へ至る状況で、女性人材が十分に生かされないことは国にとってもマイナスであり、低出産を及ぼす原因にもなる。優秀な女性人材が地域社会や国家の発展のため効率的に活用されることを韓国社会の皆に望んで欲しい。

- i センターの国費支援は支援センター数の増加とともに投資額を増加させているだけでなく、大学のマッチング・ファンドの比率も毎年5～10%範囲から徐々に増加させ60%に至っている。
- ii 利用者数は2003年5大学で10,207名であったが、2008年20大学で53,133名と、過去5年間の利用者は約5倍増加の成長をみせた。
- iii ジェンダー意識強化および仕事・家庭両立プログラムの場合、男・女大学生両方の参加を必要としている。
- iv 5つの領域は、①経歴断絶予防プログラム、②ジェンダー意識強化および仕事・家庭両立プログラム、③個人別キャリア開発管理プログラム、④職務能力訓練プログラム、⑤予備女大生プログラムである。
- v 韓国の財閥企業であるLGが2%、三星・SKが1%、現代・KIA車が0.2%の女性役員（役員）の比率である。

劉 亨淑（ゆう ひょんすく）

韓国・東亜大学校自然科学大学物理学科卒業。立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程修了 観光学博士。2002年4月～2003年3月立教大学観光学部助手。2003年4月～2004年3月立教大学観光研究所学術研究員。2004年3月～2006年2月韓国・東明情報大学校ホテル経営学科専任講師を経て2006年3月より東義大学校商経大学ホテル・コンベンション経営学科専任講師、2007年3月から助教授。

シリーズ

九州便 ～第六報～

九州産業大学商学部観光産業学科准教授

曾山 毅

北九州フィルムコミッションについて

数年前のことですが、佐賀県を台湾人観光客がよく訪れていました。これは台湾で公開された日本映画「佐賀のがばいばあちゃん」が評判になったことが影響したといえます。映画の舞台となった場所を訪れてみたいという映画ファンの感情は、観光スタイルの多様化に伴って近年ますます顕在化しているようです。このようにロケ地は地域イメージの創出や観光という点から注目されるのですが、ロケーション撮影を誘致したり支援したりする現地組織がフィルムコミッションです。私のゼミの学生が昨年、「北九州フィルムコミッション」でお話をうかがう機会があったので、今回はフィルムコミッション（以下FC）について書いてみたいと思います。

FCは、映画やテレビドラマ、CMなどのロケーション撮影を誘致・支援し、撮影に関する地域の情報提供、公共施設の使用手続きの調整などを行う非営利組織です。FCというアイデアは1940年代にアメリカ合衆国で生まれました。ユタ州のユコン渓谷で西部劇の撮影を支援するための活動として始まりました。そして今日のFCの原型となる組織は、コロラド州で1966年に設立された組織だといわれています。その後全米各地に同様の組織が設立され今日の隆盛を築いたのです。このようにFCの先進地であるアメリカでも実はそれほど長い歴史を有しているわけではありません。日本ではこうした組織は比較的最近までなかったのですが、2000年以降全国の自治体でFC設立が相次ぎ、現在では百を超えるFCが設立されています。九州各地にもFCが生まれていますが、全国でFCの活動に最も早く取り組み、豊富な活動実績を誇るのが「北九州FC」です。

北九州にFCが設立されるきっかけは、1988年に当時の北海道東北開発公庫が行った「全国11政令指定都市」の住みやすさアンケートでした。8分野42項目の指標に基づき北九州は総合1位に輝きましたが、同じアンケートの都市イメージ調査では11都市中最下位だったのです。本当は住みやすい街なのに「鉄冷えの街」「暴力の街」「文化砂漠」等というマイナスイメージが先行していたのです。このギャップを解消することが北九州市

の大きな課題となりました。その方法として映画やドラマのロケを誘致し、映像メディアを通じて北九州のイメージアップを図ることが企てられたのです。そのために1989年、「北九州市広報室イメージアップ班」が



旧大阪商船門司支店

生まれましたが、この組織はFCを名乗ってこそいませんが、日本で自治体によるこの種の取り組みの嚆矢となりました。北九州市で培われた先駆的な活動実績は、「全国フィルムコミッション設立研究会」等を通じて、まず大阪、神戸、北九州、横浜のFC設立につながり、FC設立の全国的なうねりに波及していきます。

北九州FCが1989年から今日までに誘致・支援したロケーション撮影は、映画、テレビドラマ、ドラマ以外のテレビ番組、CMなど

を合わせると1900件を超えます。その約9割はドラマ以外のテレビ番組ですが、映画とテレビドラマに限定すると107本の作品をこれまでに支援しています。例えば最近話題になったNHK制作「坂の上の雲」、映画では「海猿3」なども誘致作品です。映画やドラマに関しては、その約半数が北九州ではなく他都市の設定で撮影されているということは興味



門司港駅・駅舎

深い話です。実は他都市の設定では、北九州のイメージアップやロケ地観光には結びつきにくいのですが、他都市設定のロケーションが誘致できるということは、北九州に映像的に魅力のあるさまざまなサイトが存在することを意味しています。そして何より北九州FCのスタッフの方たちがこの世界でプロとして信頼されていることの証しともいえるでしょう。映画業界で、「北九州で撮影すると制作部の人間が育たない。北九州FCがすべて先手を打っている」とまで言われているそうです。

参考資料

長島一由「フィルムコミッションガイド」WAVE出版

「北九州フィルムコミッション」ホームページ (<http://www.kitakyu-fc.com/>)

昭和の下町

は11都市中最下位だったのです。本当は住みやすい街なのに「鉄冷えの街」「暴力の街」「文化砂漠」等というマイナスイメージが先行していたのです。このギャップを解消することが北九州市

曾山 毅(そやま たけし)

慶應義塾大学経済学部卒、立教大学大学院社会学研究科応用社会学専攻博士課程後期課程退学 観光学博士。1998年4月～2002年3月立教大学観光学部助手、2002年4月～2004年3月立教大学観光研究所学術研究員、2004年4月～2007年3月名城大学国際学部観光産業学科助教授を経て2007年4月より九州産業大学商学部観光産業学科准教授。

所長の海外体験記

その10 Cintra Street, George Town: 「幻の日本街」を尋ねて 観光研究所 所長 小沢 健市

私は、2010年3月26日（金）～3月30日夕方まで、マレーシアのペナンにあるGeorge Townに滞在する機会を得た。今回のペナン訪問には2つの目的があった。一つはペナンヒルにある、いわゆるHeritage Houseの調査とその写真を撮ること、もう一つは、およそ1世紀以上も前からGeorge Townに日本街と呼ばれていた道路とその周辺に日本人が住んでいたという事実の痕跡を確認することであった。以下では、後者について述べたい。

筆者が、日本人が、それとかなりの数の日本人がGeorge Townに在住し、生活を営んでいたということを知ったのは、Clement Laing (2002) “The Prewar Japanese Community in Penang during 1890–1940” であった。本論文は、2002年2月2日にGeorge Town, Penangにある City Bayview Hotel（現在も海側の通りの近くに存在している）で開催された Fourth Colloquium of ‘The Penang Story’, Penang’s Historical Minorities において報告された論文の一つであった。その論文の小見出しThe Little Japan at Cintra Street & Kampung Malabarで、次のような文章が筆者の目に留まった。

“The Chinese in Penang refer to Cintra Street as Jipun Kay & Jipun Heng Kay — the Little Japan Street and the Nearby Kampung Malabar as Jipun Sin Lo — the Japanese New Road — a reference to the presence of a sizable Japanese community ….”

この文章と論文のタイトルが示唆するように、19世紀末から20世紀中頃にかけて、ペナンという小さな島に、それも現在では裏通りのようなCintra St. を中心に規模は小さくとも日本人街が存在し、商店や理髪店・美容院が経営され、薬局や医者が開業していた。ちなみに、1910年12月末現在、ペナンには登録された日本人だけで207人—そして商店や薬局、ホテル等が49、滞在者のうち、男性は58人、女性は149人—（上記文献による）が在住していたのである。筆者は、19世紀から20世紀へと新しい時代へ移り変わる時期に、ペナン、特にGeorge Townの一角に日本人が生活していた事実に興味を持ち、その界隈をぜひ



Chulia Streetにある粽屋さん：日本街の文字が書かれている

St., Muntri St., Leith St., Argyll St.等 — を歩きながら、かつて在住していた日本人の異国での生活に想いを馳せながら、日本人が生活していた証になるものはないかどうかを捜し歩いた。

ところで、問題のCintra St.は、筆者が宿泊していたTraders Hotel Penangを右に出で最初の通りを右へ折れ、そこから直進すると東西に伸びる道路の4本目にKimberley St.があるが、その交差点からさらに北へ直進する道がCintra St.であり、その交差点の標識にはLEBUH CINTRAの下に漢字で「日本横街」と記され、Cintra St.の距離はKimberley St.からChulia St.までの200メートル強ほどに過ぎない通りである。

Chulia St.から南へ50～60メートルほど直進した右側に、「日本街肉粽・」の看板を掲げた中国系の人が経営する「粽」のお店があった。店の名前が気に入り、その女将に「昔このあたりに日本人が沢山住んでいたことを知っているかどうか」を尋ねたが、「知らない」との返事であった。その粽屋さんが気に入り、帰り道に、その店の前にあるお茶屋に入り、「粽屋」をしばらくの間よく冷えたコーヒーを飲みながら眺めていた。筆者は、思い切って、お茶屋の店主に「90年あるいは100年ほど前にこの辺りに日本人が沢山住んでいたことを知っているかどうか」を尋ねた。店主は、「その話は聞いたことがある。Cintra St.には1900年頃から終戦間際までは沢山の日本人が住んでいた、との話を聞いたことがある」との返事が返ってきた。しかし、残念なことに、この店主の話と道路標識以外にかつて日本人で賑わっていたという面影も確かな痕跡も探し出すことはできなかった。

“Cintra Street”、そこはかつて「日本街」と称されていたが、現在では日本人観光客もほとんど寄り付かない、正に「幻の日本街」と呼ぶに相応しい街へと変貌してしまっていた。そこで生活していた数百人の日本人は、その街にどのような貢献をし、何を残したのであろうか。



Chulia Street（日本横街）の出発点（南入り口）



Chulia Street北入り口から